

いますので参照してください。

《阿山湖とその前後の時代》

伊賀累層は、下位から上位になるにつれて細粒化していき、その上には厚い均質な粘土層が重なります。これが阿山累層で、図のBは阿山累層堆積期の中ごろ、約300万年前の古地理図です。

この時期には、図に見るように、現在の琵琶湖からその西方には大きな山地が出現しています。この山地は、いま述べたように伊賀累層の時代に隆起したもので、この時期にはすでに安定期に入っていたと考えられます。ただ最初にお断りしたように、この時代の山地地形は信頼性に欠けますが、いずれにしてもこの地域に、比較的大きな山塊あるいは山脈が存在していたことは間違いありません。

阿山累層は、主として塊状・無層理の厚い粘土層で、最も厚いところでは130mの層厚があり、伊賀・大山田地域、阿山地域、甲賀地域に分布します。阿山累層の上位には、甲賀

累層が重なります。この地層も、阿山累層と同様に塊状・無層理の厚い粘土層ですが、ただし堆積環境は異なっていて、深い湖底に堆積したものです。堆積した場所は甲賀地域が中心で、伊賀・大山田地域には認められません。阿山地域にも、この累層の下部しか分布しません。

阿山累層および甲賀累層の均質な粘土層を堆積したのが阿山湖で、この湖は、阿山累層の時代には、伊賀・大山田から阿山を経て甲賀地域まで大きく広がっていました。

甲賀累層の時代になると、新たな構造運動が発生し、堆積盆地の中心が北に移ります。甲賀地域が激しく落ちこんで、周辺の地域が隆起してきます。阿山地域は陸化し、大きく広がっていた湖は甲賀地域を中心とした狭い湖に変わります。同時に湖の水深は深くなり、沿岸部には断層崖が形成されます。この深い湖の湖底に堆積したのが甲賀累層の厚い粘土層で、この時期の湖は、甲賀累層を堆積した

ので甲賀湖とも呼ばれます。ただ湖としては一連のもので、ここでは、阿山湖の前期・後期として区別しておきます。

《蒲生湖沼群とその前後の時代》

甲賀累層の上には蒲生累層が重なります。古地理図Cは、蒲生累層後半期の約200万年前の時代を描いたものです。

蒲生累層は、当初は水口地域や日野地域で甲賀累層の上に引き続いて堆積しますが、やがてそのすぐ北側に、近江盆地の南縁にそって東西にのびる広い凹みが発生します。こうして、南は湖南地域から鏡山の南を通過して水口・日野地域に至り、さらに北は鈴鹿山脈西縁の多賀地域まで延びる広大な地域が堆積の場になります。この時期、南側の上野累層・阿山累層を堆積した地域はすでに陸化し、低地帯に堆積物を供給し始めています。

蒲生累層の層厚は280～400m、主として砂・シルト・粘土の互層からなりますが、全体的に粗粒なのが特徴です。大山田や阿山・甲賀

のような均質な粘土層が厚く発達しているところはなく、長期にわたる安定した水域があったとは考えられません。ただ場所によっては、厚さ数m、横への連続性も数kmほどですが粘土層がみられます。ですから、この広大な低地帯には、後背湿地や蛇行河川の跡にできる三日月湖のような水域がいろいろな場所にあったと思われます。それで、蒲生湖沼群と呼んでいます。

蒲生累層の堆積した同時代には、京都南部～奈良地域も堆積の場となり、ここには大阪層群最下部が堆積しています。ただし、湖南と京都南部を隔てる高まりがすでに形成されていて、これにより2つの広大な低地帯が結ばれることはなかったようです。

一方、琵琶湖地域の山塊は、長期の浸食によってその規模が次第に縮小してきたと考えられますが、しかし湖東地域には、流紋岩からなる大きな山体がまだ残っています。

《河川の時代》

蒲生累層の上には、引き続き草津累層が堆積します。その分布域は、全体として蒲生累層の北側に移り、北は彦根地域から南は湖南地域まで、近江盆地南縁の丘陵部から平野部の地下一帯に、一部は琵琶湖の湖底下にもみられます。ただし湖東地域の大きな山体に遮られ、蒲生累層の時代のように長大な低地帯が形成されることはありません。堆積の様相もだいぶ違っています。

草津累層は、層厚は約100m、礫層を主体とし、礫・砂・シルト・粘土の互層からなりますが、礫層には亞円礫が多く含まれ、均質な粘土層もなく、蒲生累層よりぐんと粗粒になります。安定した水域のみられないこの時期を、河川の時代と呼んでいます。

草津累層の最下部近くには、層序図にあるように五軒茶屋火山灰層が挟まれます。この層は、古地磁気ではオールドバイサブクロンの直上にあたり、古琵琶湖層群では、草津累層

の時代から第四紀更新世に入ります。蒲生累層の時代と共に、新第三紀の温暖な気候も過ぎ去ります。第四紀が訪れて、寒暖の気候変化が激しくなり、やがて京阪奈地域などでは水河性海水準変動に伴う海進・海退が繰り返されるようになります。

《堅田湖とその前後の時代》

草津累層の上には、堅田累層が重なります。古地理図Dは、堅田累層が堆積した時代の中頃、約100万年前の様子を描いたもので、池の内 火山灰層の層準です。この火山灰層は大阪層群のピンク火山灰層に対比されるもので、この時期、大阪層群ではMa 1の海が大きく広がり、東は宇治・奈良地域まで侵入しています。この海は古琵琶湖層群堆積域の一手前まで迫っていました。

堅田累層は、主として砂・シルト・粘土の互層からなります。さきほど山崎さんからお話しがあったように、この地層になると琵琶湖の西側にも分布が広がります。地表部では、

図1-3 - 古琵琶湖層群の古地理図

- A: 上野累層堆積期(約380万年前)
- B: 阿山累層堆積期(約300万年前)
- C: 蒲生累層堆積期(約200万年前)
- D: 堅田累層堆積期(約100万年前)
- E: 高位段丘形成期(約30万年前)

- 凡例
- 低地
 - 丘陵(一部低地を含む)
 - 山地(低)
 - 山地(中)
 - 山地(高)
 - 沼沢地
 - 湖
 - 海

